

第12回日本皮膚科心身医学会を開催して

片桐 一元

獨協医科大学埼玉医療センター皮膚科教授

はじめに

2022年1月15・16日にさいたまソニックシティで、「皮膚科心身医学のスペシャリストから学ぶ」をテーマとして、本学会では初めてとなる2日制の学会を開催いたしました。オミクロン株による感染が急拡大する中、現地に約50人、合計142人(有料122人)にご参加いただきました。

私はアトピー性皮膚炎の診療を通じて心身医学的な対応を迫られることも多く、2017年に本会に入会させていただきましたが、なかなか実践する

ことはむずかしいと感じております。今回は本会への入会の勧誘になることも期待して、自分が聞きたい、教えてもらいたい以下の内容でプログラムを構成させていただきました。

初日プログラム

「発達障害への対応:皮膚科医にできることは？」
本田秀夫先生(信州大学子どものこころの発達医学教室):発達障害ではその内面を考えすぎず、苦手な部分を補助する。その際、「あいまい」は苦手なので、わかりやすくイラストなど用いると有効である。感覚過敏も特徴で、光、白い色などに過剰に反応する。外来でも似たようなことがある気がしました。さらに、軟膏は外用できないがクリームなら外用できる患者は、感覚過敏があるのではないかと考えました。

「小児の皮膚科診療と心身医学」細谷律子先生(細谷皮フ科):家族の絵や見取り図による心理アセスメントに始まり、種々の心身医学的アプローチを用いて、さらには臨床心理士と協働し、発達障害に具体策を実践、成人後のクリニックでの笑顔の写真を治療からの流れでみると、映画でも見ているような気がしました。

そのほか上田英一郎先生(大阪医科薬科大学病院医療総管理部)には「心身医学用語の解説」、上出良一先生(ひふのクリニック人形町)には「皮膚科心身医学事始め」と題した患者がほっとして泣き出す傾聴的問診について、清水良輔先生(皮ふ科しみずクリニック)には主体性が患者に移るブリーフセラピーについてご講演いただきました。私はいまの

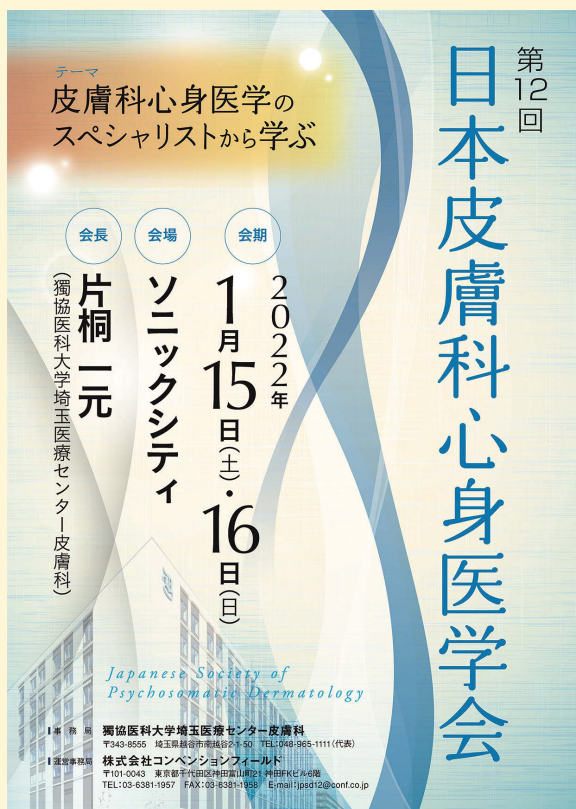


図1 本会ポスター



図2 会場の様子

ところ、ドキドキしながらミラクルクエスチョンをするレベルですが、これから楽しみたいと思っています。一般演題では、心因性と思われた疥癬、寄生虫妄想、自己炎症性疾患を疑われた適応障害、皮膚むしり症状が出題されました。

2日目プログラム

「5分で使う皮膚科心身医学の技」として、①「明日からできる傾聴のコツ」堀仁子先生(市立旭川病院皮膚科):聞き出すスキル、問診は患者と医療者のギャップ、コーチングでは答えはplayerがもっている、②「皮膚科における向精神薬」羽白誠先生(はしろクリニック):抗うつ薬などの24歳以下での使用は自殺念慮のリスクが高くなる、眠気は抗ヒスタミン薬と同じで、抗不安薬とは異なる、③「行動学的アプローチ」檜垣祐子先生(若松町こころとひふのクリニック):治療をしている患者は、何か方法はないかと思っている、スクラッチ日記で掻き方を見抜き行動修正+コミュニケーション、④「自律訓練法」山北高志先生(刈谷豊田総合病院皮膚科):講演を聞きながら実践しても上肢が重くなり温かくなる「自律訓練法」と元に戻す消去運動についてノウハウを伝授いただきました。

特別講演では、当院のこころの診療科の薬を使わない精神科医として有名な井原裕先生に「生活習

慣医の観点からみたアトピー性皮膚炎」のテーマで、古代人からの進化論の話から、主として睡眠の重要性(短い昼寝は取ってよい)をご講演いただきました。

最後は脱毛症と心身医学がテーマで、植木理恵先生(順天堂東京江東高齢者医療センター皮膚科)には「トリコチロマニアの長期予後:成人例、アトピー性皮膚炎合併例を含めて」(痒いと訴える患者も多い、抜くと気持ちよい、擦る患者も多い)について、齊藤典充先生(なごみ皮ふ科)には「円形脱毛症患者の心のケアについて」と題し、患者会活動についてご講演いただきました。

おわりに

スポンサードセミナーも関連する演題を準備していただき、皮膚科心身医学が少しは沁み込んだ気がしました。理解が進み、頭の中のしこりは小さくなりましたが、久しぶりに長時間会場の前方で過ごしたためひどい背部痛になりました。ご参加いただいた先生方が、新たな一步を刻むきっかけになれば何よりです。自分の取ったメモを頼りに本稿を作成しましたので、内容に誤りがある可能性もありますが、ご容赦いただきますようお願い申し上げます。